

オードリー・ヘプバーンのように死の直前まで人に尽くしたいと、患者会の名に引いた。07年8月、大分県豊後高田市の自宅、森下東樹撮影



## 乳がん体験を語った元養護教諭

# 山田 泉さん

やまだ・いずみ

11月21日死去（乳がん）49歳  
11月23日葬儀

亡くなる12時間前だった。ホスピスのベッドで、意識がないまま突然、聞き取れる声でしゃべった。

「生きることは、人のために尽くすこと。これで終わります！」

周りに寄り添った家族、そして医師らが思わず拍手すると、それを確認するかのようには笑みを見せた。最期まで「いのちの授業」を貫いた。

大分県の小中学校の養護教諭として28年間、性教育や人権、平和、障害者支援に情熱を注いだ。保健室は悪ガキや心の弱った子らであふれた。いつも生徒の味方で、職員室では孤立した。乳がんとわかったのは00年。大分で初めて乳がん患者の会を立ち上げ、初めて「オードリーの会」と名付けた。

02年春に復職。生徒たちが軽々しく放つ「死ね」「殺せ」の言葉におののいた。ある女子生徒に「ここにはおれん」と泣き言を漏らすと、こう言われた。「自分の命も人の命も大事と感じ

## 「いのちの授業」最期まで

られる授業をしにきちよくれ」。自らの体験を教室で話したのが「いのちの授業」の始まりだ。ハンセン病の元患者や脳性まひの書道家ら、必死に生きている有名無名の人を講師に呼んだ。しかし、がんは再発。昨春、教壇を去った。2度目の再発で積極的な治療をやめた後も、毎週水曜日自宅の間を「保健室」として開放し、元教え子らと語り合った。今年10月まで児童養護施設に通い、子どもの相談にのるボランティア活動もしていた。

人を引き寄せる不思議な魅力があった。昨年のパリ旅行で出会った人との交流を描くドキュメンタリー映画「ご縁玉」が完成。夫真一さん(52)に「間に合っって良かった」と話したという。今月、大分を皮切りに封切られた。

大分県豊後高田市での葬儀には1100人以上が参列した。思いのこもった弔辞に皆が泣き、「山ちゃん」らしい逸話に皆が笑った。（高橋美佐子）